

オイルラッシュとオイルマン

——ペンシルヴェニア州マッキーン郡ブラッドフォード油田——

豊 田 太 郎

要旨

本稿は、1870年代にペンシルヴェニア州マッキーン郡ブラッドフォード油田で発生したオイルラッシュを、その担い手となったオイルマンの具体像から描こうとするものである。ブラッドフォード油田は、その良質な油層性状と土地所有の経済的利害の作用を槓杆として、短期間のうちに全国の8割超の原油を産出するようになった。そこに殺到してきた大勢のオイルマンを1880年センサスでみると、大部分が原油生産者と掘鑿人で構成されていて、他の油田とは著しい対照を成す。また、彼等、特に若い掘鑿人のなかには多くの単身の下宿人が存在し、いわば原油生産者予備軍を形成していた。次に、マッキーン郡の原油生産者の過去の足取りを追跡したところ、多くが南方油田で坑井掘鑿等の経験を有していた。これは、原油生産者への上昇を目指して油田から油田へ渡り歩く多数の「流れ者」の存在を示唆している。掘鑿人を中心とした多数の下宿住まいの「流れ者」こそが、オイルラッシュのエンジンを構成した人々だったのである。

キーワード：アメリカ石油産業、原油生産者、石油ブーム、油田開発

は じ め に

「新たな井戸で石油を掘り当てると、大いなるラッシュの合図となる。というのも掘り当てた土地の処分権を持つ人間が、油井の生産量と油田の広がりについて誇張した情報を発するからである。物静かな田舎の村が瞬く間に大きなビジネスの中心地になる。馬車がやってきては、油井機材や材木、食料を降ろしていく。狭軌の鉄道路線が計画され、驚くべき速さで建設されていく。角地は途方もない価格で販売される。投機的な人々が町へ流れ込んでくる。やってきては出ていく人々だ。よく見かける並の労働者 (laborer) が1カ月後に頭 (foreman) になり、6カ月後には油井のオーナーになる。1年後にはついに裕福なジェントルマンになる。いくつかの地味な作りの学校と教会を持つ静かな田舎町も、大都市の雰囲気と悪習を身につけ、農民は両替商になる。石油を掘り当て、冷静さを失わない運の良い人間はたいがい、一切合財をまとめて、異常に発展した村を棄て、ニューヨークあるいは他の大都市に出ていってしまう。村に残って、幼少時代からの故郷の発展に死ぬまで尽くす人間などほんの僅かである。タイタスヴィル (Titusville)、オイルシティ

* 本稿は平成20年度札幌大学研究助成による研究成果の一部である。

(Oil City), タイデュート (Tidioute), フランクリン (Franklin), それにブラッドフォード (Bradford), これら全てそういった町の実例だ。しばらくすると投機的な時期が過ぎ去る。安定し落ち着いた発展の時期がやってきて、油田地帯の範囲が確定する。機敏な人が利益の上がる土地の支配を確保する一方、流れ者の連中は、この時までに新しい油田に移ってしまっている。彼等にとって代わって入ってきたのは、もっと堅実で、思慮分別に欠けることもないためか、ほどほどに成功を収めた人々で、その土地に留まるためにやってきた人々である。落ち着く先のない流れ者が及ぼす影響についていえば、有益なことはほとんどない。私が知ることとなった実例として、無謀極まりない改良工事の仕組みがある。必要以上に豪華な学校の建物が建設されたことがあるが、その費用は地中から採取される原油に課される税によって支払われず、自治体が起債して賄うことになったのである。費用は自治体住民が将来のある時点で支払い終えるのであるが、臨時の資源である原油が採取し尽くされてからも長く、自治体の負担として残されるのである。¹⁾

これは、詳細な石油産業の調査報告に充てられた1880年第10回連邦センサス第10巻の第1部第6章「油田地帯の発展」からの抜粋である。通常、いわゆる「オイルラッシュ」を描写する場合、とりわけ活気づいた産業発展をクローズアップすることが多いのであるが、センサスの特別調査官ペッカム (S. F. Peckham) は、ここにラッシュとそれを担った人間とコミュニティを登場させた。後段には、なにやら石油を求めてやってきた人々に対する恨み節のような言葉も聞かれる。この短い文章のなかには、他にも興味深い点が散見されるのだが、ここでは大雑把な当時の油田地帯のイメージを提起しておくに止める。読者は本論のなかで再びこのペッカムの言を想起させられることになるだろう。それでは、以下、本稿の課題と視角を明らかにすることから始めよう。

1859年8月のエドウィン・L.ドレイク「大佐」(“Col.” Edwin L. Drake) による油井掘鑿の成功以来、ペンシルヴェニア州北西部を中心とした地域ではオイルラッシュが繰り返し展開された。これに伴って原油生産量は増加の一途をたどり、石油産業の下流部門で資本的結合を推進するスタンダード・オイル社にも潤沢な原油供給を保障することができたのである。1888年に至って、同社が上流部門＝原油生産部門へ本格的に参入するまでは、アメリカにおける原油生産は中小の原油採掘業者(本稿ではオイルマンと呼称する)が専ら担ったといってよい。さらにそれ以降、反トラスト法に基づく「解体」判決が下る1911年までの時期についても、同社が原油生産部門に持った支配力は同社の下流部門での支配力に遠く及ばなかった。油田地帯では、20世紀に入ってもなお中小のオイルマンによるラッシュが継続していくのである。このことは20世紀初頭以降、同社のライバル企業の揺籃の地となったテキサスならびにミッドコンチネントで、所狭しとデリック(油井槽)が林立したランドスケープからも明確である。要するに、代表的なビッグビジネスとしてのスタ

1) S. F. Peckham, “Report on the Production, Technology, and Uses of Petroleum and Its Products.” In U. S. Census Office, *Tenth Census 1880. Special Reports on Petroleum, Coke, and Building Stones*, Washington D. C.: GPO, 1884, pp. 75-76.

ンダード・オイル社ではあるが、同社がマンハッタンのブロードウェイ26番地に聳え立つ上での不可欠な存立基盤は、多数のオイルマンの労働と小金を伴うオイルラッシュにこそあったのである²⁾。

筆者はこれまで、巨大企業からみたアメリカ石油産業像ではなく、多数の原油生産者からみたアメリカ石油産業像の構築に努めてきた³⁾。そもそも、前者を課題とするならば、ハイディ夫妻らによる膨大な研究蓄積が既に存在している⁴⁾。そこで筆者独自の研究テーマを具体的にいえば、主に、オイルラッシュの人的・物的生産条件、オイルラッシュにおける土地所有の経済的利害を解明することであった。言い換えれば、ペンシルヴェニア州の油田地帯（オイルリージョンズ）で活動したオイルマン、企業に焦点を当てて当時の油田開発の経済的メカニズムを明らかにすること、であった。そこでは、原油生産部面に関わる経済的諸利害が交錯するなかで、多数のオイルマンが乱掘に駆り立てられ、オイルラッシュが進展していく様を、1860年代のヴェナンゴ郡ピットホール（Pithole, Venango County）という具体的な事例に基づいて実証した。ただ、具体的・限定的な実証であったという点で、採り上げた事例以外の時期・場所で発生したオイルラッシュ、あるいはその事例でよく判らなかったことなどは、その時点ではアナロジーで片づけ、今後の課題としていたのである。

就中、従来の筆者の研究で明確でなかったのが、オイルラッシュあるいはオイルブームを担った人々の具体像・実体である。すなわち従来の研究では、オイルラッシュが引き起こされる経済的利害の作用の仕方（メカニズム）に焦点を当てていたこともあって、特定地域への多くの人々の殺到はその現象形態として抽象的に描定されていた印象が否めない。そこで本稿では、1870年代後半から本格的な開発が進められたペンシルヴェニア州マッキーン郡ブラッドフォード油田（Bradford oil field, McKean County）を事例に、オイルラッシュを担った人々の具体像を可能な限り探ってみることにする。ブラッドフォード油田を対象にする根拠はいくつかあるが、最も重要な点は、ごく短期間のうちにアメリカ国内の原油生産量の8割以上を産出する主要油田となった事実である。短期間で原油生産量の急増と圧倒的シェア、という点では19世紀中のアメリカでこれを超える油田はない⁵⁾。詳

2) 本稿でスタンダード・オイル社と表記した場合、それはジョン・D. ロックフェラーの支配下にある企業群全体のことを指している。

3) 豊田太郎「オイル・ラッシュ——土地と石油を求めて——」日本経済史研究所編『経済史研究』第4号、2000年3月；同「19世紀アメリカ、オイル・リージョンにおける油田経営——United States Petroleum Company を事例にして——」『経営史学』第39巻第2号、2004年9月。

4) Ralph W. Hidy & Muriel E. Hidy, *History of Standard Oil Company (New Jersey): Pioneering in Big Business 1882-1911*, New York: Harper & Bros., 1955.

5) 19世紀アメリカで生産量が際立った油田地帯としては、ライマ・インディアナ（Lima-Indiana）油田が想起されるだろう。ライマ・インディアナ油田はいわば油田地帯の大区分であって、アパラチア油田地帯と対応関係にある。したがってブラッドフォード油田に対応するのは、例えば、ライマ・インディアナ油田のなかで最大規模のライマ（オハイオ）油田ということになる。ライマ油田は20世紀初頭に至るまで安定した生産を続けたが、本文で述べた要素についてはブラッドフォードに

細は本論に譲るが、原油採掘活動面からすれば典型的なオイルラッシュが発生したものと判断してよい。また第二に、ブラッドフォード油田の原油生産量のピークが1881年だという点がある。ラッシュに係わる人々の人口動静を知ろうとすれば、センサスを用いる必要があるが、1880年6月に実施された連邦政府の第10回人口センサスは、ブラッドフォード油田の生産量のピーク時を捉えたものといえる。1870年にはブラッドフォードの油田開発はほとんど進んでいなかったから、この1880年のセンサス記録を検討することで、この地にやってきた人々の動態を鮮明な形で浮かび上がらせることが出来るだろう。ちなみに、前述のピットホールでは1860年代中頃の3年間ほどで生産量が減衰してしまったから、センサス上でラッシュを捉えることは困難となっている。そうした場合、従来の研究では地方紙の推計などに基づいてブームタウンの人口がよく述べられるのだが、計測の手法も含めて根拠が曖昧であった⁶⁾。第三に、関連して、ブラッドフォード油田と、ヴェナング郡やバトラー郡などに賦存する既存の油田とが、地理的に少し離れていたことがあげられる。新油田＝ブラッドフォードへの人口の動きと既存油田に関連するそれとを切り離して前者をより明瞭に把握することができよう。

以下、まず全体の基礎作業として、ブラッドフォード油田の開発プロセスをみる。次に、どれくらいの規模の人口移動がオイルラッシュとして起こったのか、またブームタウンとしてのブラッドフォードの形成過程、集積した人口の職業構成などをみる。続いて郷土史に書かれた伝記等を利用し、50人のオイルマンの略歴から、センサスでは判らない彼等の特徴を析出することにしたい。油田に殺到してきた人々のバックグラウンドはどのようなものであったか、ということになる。

Ⅰ ブラッドフォード油田の開発過程

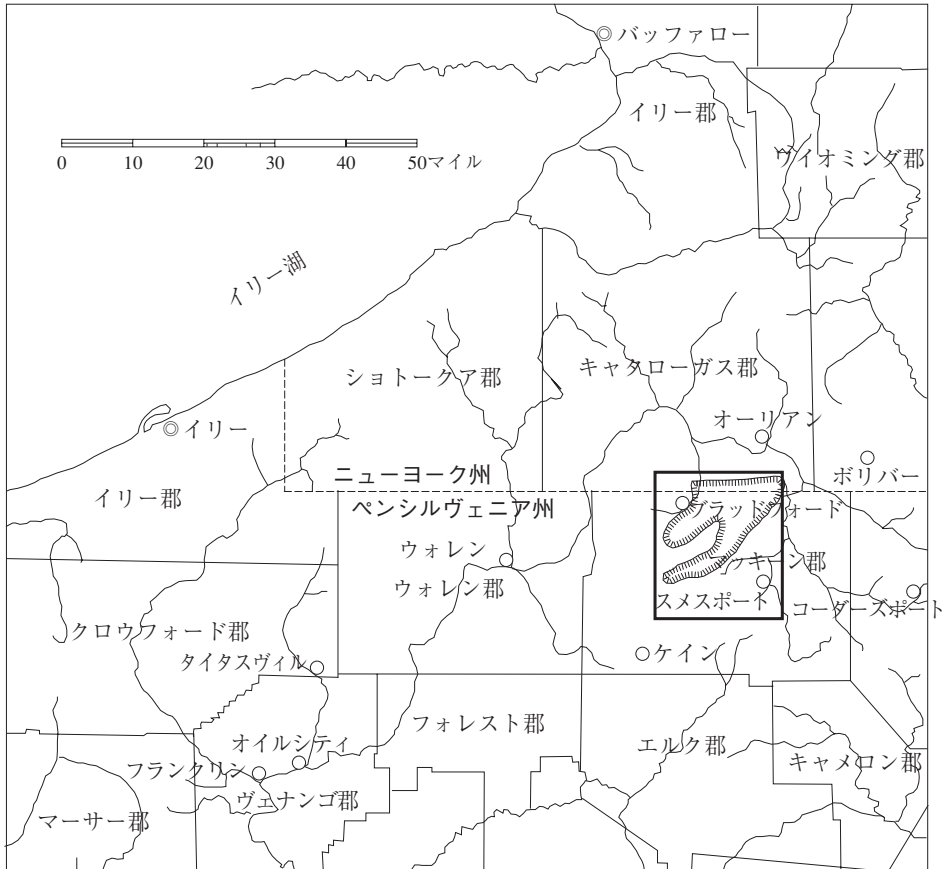
1 ブラッドフォード油田の概観

まず、ブラッドフォード油田の位置を、ペンシルヴェニア州地質調査所の報告から引用した第1図で確認しておこう。長方形の太線で示されている油田は、ペンシルヴェニア州マッキーン郡北境の町、ブラッドフォードを包含して賦存していることが判る。油田の大部分は同郡内に収まっているが、その北端はニューヨーク州キャタローガス (Cattaraugus) 郡に突出しており、全体として2つの州にまたがる格好となっている。距離にして概ね南北21マイル、東西18マイルに広がった油田で、アパラチア (Appalachian) 石油地帯の一角を成す。太線で囲われたなかに、不規則に曲線で囲われた箇所があるが、これが主にブラッドフォードの石油貯留岩層＝油層 (pool) を内包する地域であり、面積にして約8万4,000エーカーに及ぶ。それはアレゲーニー川上流に注ぐチューナクリーク (Tuna Creek) とその支流域を中心とする地域であった。

及ばない。Department of Commerce and Labor, Bureau of the Census, *Special Reports: Mines and Quarries 1902*, Washington D. C.: GPO, 1905, pp. 731-743; American Petroleum Institute, *Petroleum Facts and Figures*, Ninth Ed., New York, 1951, pp. 152-153.

6) 例えば、Paul H. Giddens, *The Birth of the Oil Industry*, New York: McMillan, 1938, p. 139 を参照。

第1図 ブラッドフォード油田



(出典) Charles R. Fettke, *Bradford Oil Field: Pennsylvania and New York*, Pennsylvania Geological Survey Fourth Series Bulletin M21, Harrisburg, 1938, p. 2.

続いて、この油田とアメリカ国内全体の原油生産量の推移(1870～1900年)を第1表で確認しておく。これによれば、1870年代前半のブラッドフォード油田生産量は微小であり、本格的な原油生産が始まるのは1875～76年になってからのことである。それ以降の生産量は爆発的な拡大をみせ、1881年にはピークの2,300万バレル弱を記録することになる。以後は一転、生産量の急激な減衰が始まり、1890年には約560万バレル、1900年に至って約300万バレルまで落ち込んでいる。他方、アメリカ国内全体の生産量との対比でいえば、ブラッドフォード油田の占める割合は1876年には僅か4%程度に過ぎなかったが、以後急伸し1880～81年に80%を超えている。この時期、ブラッドフォード油田のみでアメリカの殆どの原油供給を担ったということになる。それ以降は、1890年には約12%、1900年には約5%、と急激な低下をみせている。概して、統計上では劇的なライフサイクルをたどったといえるが、具体的な油田の開発過程はどうであったか、以下でみておこう。

第1表 ブラッドフォード油田の開発過程

年	国内原油生産量 (bbls.)	ブラッドフォード油田				国内原油生産量 に占めるブラッ ドフォード油田 の比率 (%)
		原油生産量 (bbls.)	新規坑井数	空井戸数	空井戸率 (%)	
1870年	5,260,745	—	17※	—	—	—
1871年	5,205,234	1,000		—	—	0.02
1872年	6,293,194	2,000		—	—	0.03
1873年	9,893,786	2,000		—	—	0.02
1874年	10,926,945	3,000		—	—	0.03
1875年	12,162,514	25,000		—	—	0.21
1876年	9,132,669	382,768	376	25	6.65	4.19
1877年	13,350,363	1,468,481	905	48	5.30	11.00
1878年	15,396,868	6,208,746	2,026	88	4.34	40.32
1879年	19,914,146	13,914,509	2,475	66	2.67	69.87
1880年	26,286,123	22,212,000	3,823	62	1.62	84.50
1881年	27,661,238	22,945,069	2,876	51	1.77	82.95
1882年	30,510,830	17,959,000	863	26	3.01	58.86
1883年	23,449,633	13,294,886	801	30	3.75	56.70
1884年	24,218,438	11,883,000	601	25	4.16	49.07
1885年	21,847,205	10,564,298	484	18	3.72	48.36
1886年	28,064,841	9,752,797	413	36	8.72	34.75
1887年	28,278,866	7,580,979	142	17	11.97	26.81
1888年	27,612,025	5,306,062	49	8	16.33	19.22
1889年	35,163,513	5,765,053	568	23	4.05	16.39
1890年	45,823,572	5,608,735	901	50	5.55	12.24
1891年	54,292,655	5,452,418	278	18	6.47	10.04
1892年	50,509,657	4,291,061	30	11	36.67	8.50
1893年	48,431,066	3,502,136	49	6	12.24	7.23
1894年	49,344,516	3,359,835	284	46	16.20	6.81
1895年	52,892,276	3,244,808	579	76	13.13	6.13
1896年	60,960,361	3,604,771	759	77	10.14	5.91
1897年	60,475,516	3,904,230	697	114	16.36	6.46
1898年	55,364,233	3,444,299	488	63	12.91	6.22
1899年	57,070,850	3,206,845	642	100	15.58	5.62
1900年	63,620,529	3,022,493	404	—	—	4.75

(出典) Department of Commerce and Labor, Bureau of the Census, *Special Reports: Mines and Quarries 1902*, pp.730, 733 ; Fettke, *op. cit.*, p. 292 ; Derrick Publishing Company, *Derrick's Hand-Book of Petroleum*, vol. II, *a Complete Chronological and Statistical Review of Petroleum Developments during 1898 and 1899*, Oil City, Penn., 1900, p.169 より作成。

(備考) ※1868～75年を合計した数。

2 開発過程

ブラッドフォード油田で初めて油井掘鑿が試みられたのは、ドレイク油井成功から3年後の1862年のことであった。掘られたのはウェストブランチ (West Branch) 流域のホイットニー農場 (Whitney farm) に位置したバーンズドール井 (Barnsdall well) で、地下200フィートの深度までスプリングポール法 (spring pole)⁷⁾ で掘鑿されたが失敗に終わった。なお、1866年春になって地元の住民たちによってこの井戸の掘鑿は続けられ、地下875フ

イトまで達するのだが、彼等は成果がないまま作業を中断してしまった。1865年には、ニューヨーク州ミドルタウン (Middletown) の投資家が設立した石油会社 (King Oil Company) がイーストブランチ (East Branch) 流域のシェパード農場 (Sheppard farm) で油井掘鑿を企図し、ディーン兄弟 (Dean Bros.) が掘鑿に当たったが、900フィート掘進しても成功に至らず作業は中断された。ディーン兄弟の別の区域 (Clark farm, Tarport) での掘鑿も605フィートのところで失敗に終わっている。一方、ブラッドフォードの北7マイルに位置するニューヨーク州ライムストーン (Limestone) 近辺では、1864年にモーゼス (Job Moses) が1万エーカーの土地を購入した後、6本の油井掘鑿を試み、いくらかの原油とガスの産出をみた。モーゼスは翌年の10月に、自噴井「モーゼス油井」を深度1,050フィートで掘り当てたが、ケーシング不備のため短期間のうちに油井としての価値を失ってしまった。⁸⁾

1860年代のブラッドフォード油田については、以上の他にも、少量の産油や油井掘鑿の失敗といった記録がいくらか存在する。ドレイクの成功直後にマッキーン郡にまで開発の手が及んでいた事実は注目すべきであるが、油田開発自体は総じてうまくいかなかったようである。その理由については、1860年代当時オイルラッシュに沸いていたヴェナンゴ郡の砂岩質油層の深度を、単純にブラッドフォード油田にも適用したからだ、とされている。つまり、後者の油層 (Bradford Third sand) は前者のそれよりも深い位置に賦存していたということである。既知の油田以外で新たに井戸を掘るということになれば、当然ながらそれは試掘という性格が強くなる。経験に基づいた一定の幅の条件を想定したうえで、試掘して油徴が出なければ、それ以上の掘鑿は単なるコストの上積みになる。当時のオイルマンの地質構造の理解では、そのように考えても無理からぬところであった。また、珍しく深くまで掘ったモーゼス油井の例があるが、油層からずれて生産量が少量であったこと、短期間で失敗したこと、などから続く油井掘鑿が試みられなかったものと推定される。

1871年11月になって、モーゼス、バッツ (James E. Butts)、フォスター (C. H. Foster) らによって組織されたパートナーシップ、フォスター石油会社 (Foster Oil Company) がブラッドフォードの北東2マイルに位置するヒンチー農場 (Hinchey farm) で油井掘鑿を成功させた。この油井の生産量は10バレル／日 (以下, barrels per day: BD と略す) と少量であったが、初めてブラッドフォード油田の砂岩質油層 (1,110フィート) に到達した油井となった。その後は目立った成功がみられず、ようやく1874年12月になってバッツとフ

7) スプリングボール法については、豊田「オイル・ラッシュ」153頁参照。

8) チューナクリークおよびその支流域の地理については、J. H. Beers & Co., *History of the Counties of McKean, Elk, Cameron and Potter, Pennsylvania with Biographical Selections*, Chicago, 1890, p. 162; Fettke, *op. cit.*, Areal Geology, Bradford Quadrangle (Plate B) を参照されたい。なお、ここで採り上げたジョブ・モーゼス (1816～1887年) はニューヨーク州方面からのブラッドフォード油田開発のパイオニアといえる人物で、当初は売薬の製造・販売を本業としていた。1883年3月、彼は20年近くにわたって続けた油田開発にピリオドを打ち、7,000エーカーの所有地を売却してニューヨーク市へ移住した。Derrick's *Hand-Book of Petroleum*, II, pp. 331-332; *The New York Times*, May 31, 1883; U. S. Census, Population (MSS), Carrolton, Cattaraugus County, NY, 1880.

ォスターがブキャナン農場 (Buchanan farm) で油井掘鑿に成功した。この油井は生産量70 BD を記録し、油田の収益可能性についてのオイルマンの確信を強めることになった。翌年には、本格的な自噴井の成功が複数報じられるようになったが、タイタスヴィルの著名なオイルマン、クロッカー (Frederick Crocker) による油井もそのうちの一つであった。この油井はタポートの北1マイルに位置するキングスベリー農場 (Kingsbury farm) に掘られ、当初は75 BD、5フィート掘進後には200 BD を自噴し大きな反響を呼んだ。また、ライムストーン近辺のチューナクリーク流域に位置するクルックス農場 (Crooks farm) では、1860年代にピットホールなどで経験を積んだアルムステッド (J. B. Olmsted) が125 BD の自噴井を掘り当てた。

油田地帯で発行されていた地方紙の記事を年代順に整理した *Derrick's Hand-Book*, II のなかでも、1875年に入るとオイルラッシュを描写した記事が散見されるようになる。「新油井付近の土地をリースしようとする大規模なラッシュが発生しているが、最初にやってきた山師たち (operators) によって良い条件の土地は既に取得されてしまっている」(1875年3月25日)、「南方油田 (the lower region) からやってきた山師が大挙して新油田に群がってきており、リースの需要が高まっている。」(1875年8月1日)「地方紙 *The New Era* は、潜りで営業しているブラッドフォードの“安酒場 (gin mills)”を減らすように、また、もっと徹底して法と秩序が守られるように、世論に訴えかけている。」(1876年1月29日)「数多くの頼りになる山師たちが南方油田からここにきている。彼等はこの油田の将来に確信を持っていて、準備が整い次第開発に着手することになろう」(1876年2月2日)⁹⁾ こうした記事は、さらなるラッシュの引き金となり、以降の開発はまさに「蒸気ローラー」の如く進んでいくことになる。第1表の新規坑井数を見ると、1876年の376本からピークとなった80年の3,823本に至るまで生産量の歩調と合わせて急拡大したことが判る。1880年9月時点での生産井総計は約7,500本に達し、同月の生産量は日量平均ではピークとなる6万9,000バレルを記録した。さらに、1881年9月の生産井総数は1万1,200本で、同年の年間生産量を均して日量換算すると6万2,863バレルであった¹⁰⁾。「どこもかしこも石油だらけだ。飲み水ですら石油が混じっていないものはない。」¹¹⁾ こうした状況が現出していた。

この猛烈なオイルラッシュはなぜ発生したのか。筆者は多数のオイルマンを当て込んだ土地所有の経済的利害、短期間にパイプラインを張り巡らせ商品としての原油を確立していったロックフェラーら資本の利害、ここに一攫千金を狙う中小のオイルマンが巻き込まれていったものと基本的に理解しているが、石油を当てる可能性ならびに収益性という側

9) *Derrick's Hand-Book of Petroleum*, II, pp. 222-223, 228. 南方油田とは、ヴェナング郡、バトラー郡などに賦存したドレイク以来の既存油田を指す。1876年1月29日付の記事は、オイルラッシュをいわば間接的に描写したものとみてよい。

10) Fettke, *op. cit.*, p. 7.

11) Harold F. Williamson and Arnold R. Daum, *The American Petroleum Industry: The Age of Illumination 1859-1899*, Evanston, Ill.: Northwestern Univ. Press, 1959, p. 383.

面でブラッドフォード油田は重大な特質をもっていた。ここで再び第1表をみられたい。1878～81年にかけて最も多くの新規坑井が掘られていることが判る。注目さるべきは、このブームの4年間の平均空井戸率が2.60%という低い比率で推移していることである。すなわち、1879年にヴェナンゴ、バトラー、ウォレン (Warren)、クラリオン (Clarion) 郡で掘鑿された新規坑井475本についてみると、空井戸数は122本で率にして実に25.68%にも上ったのである。ペッカムはこうした点を念頭に置いて、こう述べている。「ブラッドフォード油田で掘られた油井の最初の1ヵ月間の〔油井1本あたり〕平均原油生産日量が約20バレルであったのに対して、ヴェナンゴ油田の油井がそれだけの平均生産量に達することはなかった。一方、ヴェナンゴ油田で掘鑿された油井のなかには、2,000～3,000 BDの原油を生産したのもあったが、ブラッドフォードでは、これまで発見された最大の油井でもたかだか数百 BD 程度であった。最大規模の個別の油井は西方油田〔南方油田〕に、最大規模の〔1油井あたり〕平均生産量の油井は北方に分布したといえる。」(〔 〕内は引用者。以下同様)¹²⁾ 以上が第一の特質である。第二に、1881年に至るまでは自噴井がブラッドフォード油田で支配的であった事実も重要である。自噴井はポンプなどを利用した人工採油井 (pumping well, etc.) と比較してコスト面で圧倒的に優位となる。開発の初期段階で自噴井がみられるのは何もこの油田に限ったことではないが、その一様の分布たるや傑出したものであった。ニューヨークタイムズ紙はこう述べている。「オイルリージョンズにおける代表的な産業のひとつである採油ポンプ製造業は、この油田の性状が認識されるや、概して姿を消してしまった。油田開発が始まってから数ヵ月前に至るまで、ブラッドフォード地域では「サッカーロッド (sucker-rod)」などという言葉は知られてもいなかったのである。」¹³⁾ この背景としては、厚さが50フィートにも及ぶ石油貯留岩層の存在が考えられる。総じて、分厚い「石油貯留岩層の分布が既存油田よりも均質」¹⁴⁾ であったため、「確実に油層を見つけられるばかりでなく、例外なく油井は自噴井であった」¹⁵⁾ ことがブラッドフォードのオイルラッシュに拍車をかけたのである。石油を他者に先駆けて獲得しようとしたオイルマンは、同時に、自噴井の淵源である油層圧が他人によって抜かれてしまう前に掘鑿しなければならないという競争圧力にも促迫されていたといえる。¹⁶⁾

12) Peckham, *op. cit.*, pp. 13-14.

13) *The New York Times*, August 29, 1881. ここで述べられている「サッカーロッド」とは、ポンピング井において地上の動力を坑内採油ポンプに伝達するロッドのことを指す。

14) *Derrick's Hand-Book of Petroleum*, II, p. 162.

15) *The New York Times*, August 29, 1881; 「この油田では、人々はリスクをほとんど冒すことなく着実に金持ちになっている」*Derrick's Hand-Book of Petroleum*, II, p. 256.

16) この節については、特に断りのない限り、以下の文献を参照されたい。*Derrick's Hand-Book of Petroleum*, II, pp. 162-170, 220-221, 228, 253-256, 331-332; Fettke, *op. cit.*, pp. 5-7; Peckham, *op. cit.*, pp. 13-14; *History of the Counties of McKean, Elk, Cameron and Potter*, pp. 62-63; Charles Albert Ashburner, *The Bradford Oil District of Pennsylvania*, publisher & publication date unknown; John J. McLaurin, *Sketches in Crude Oil*, Harrisburg, Penn.: Private Publication, 1896, pp. 189-190; Williamson & Daum, *op. cit.*, pp. 381-383; Department of Commerce and Labor, Bureau of the Census, *Special*

3 石油会社の事例

ブラッドフォード油田で原油採掘事業に当たった企業について、筆者はアニュアル・リポートといった一次資料をまだ入手し得ていない。ここでは主として地方紙オイルシティデリック (*Oil City Derrick*) が1877年12月25日に掲載した油田開発のレビューに依拠して4社を概観し、その油田経営の特質を述べるに止めたい。

●ブラッドフォード・オイル社 (Bradford Oil Company)

この石油会社はブームが始まった頃の1876年4月20日に設立された。資本金は3万2,200ドル (322株×100ドル) であり、油田地帯に所有地 (fee)・リース合わせて6,000～8,000エーカーを保有していた。出資者は、チェインバース (Wesley Chambers), ジョーンズ (Joseph T. Jones), ペック (L. G. Peck), フリーマン (L. F. Freeman) であり、前三者は役員を兼ねていた。他に会社のブラッドフォード・オフィス代表としてパワーズ (T. J. Powers) がいた。当時、会社が事業を行っていた区域は、ウェストブランチ、イーストブランチ、フォアマイルラン (Four-Mile run), インディアンクリーク (Indian creek), ナップスクリーク (Knapps creek) 流域であり、そこでの生産井は31本であった。会社は8分の1 (産出原油に占める割合) のロイヤルティという条件で土地をリースした上で、その一部を4分の1のロイヤルティでサブリース (sub-lease) に出していた。同社はまた、南方のキンツア地域 (Kizua region) にも4,000エーカーを所有し、油田開発の拡大を企図していた。¹⁷⁾

●クウィンチュプル・オイル社 (Quintuple Oil Company)

この会社は1875年の終わり頃に設立され、その規模は地域でも最大級であった。大部分の出資者をその出資比率とともに列挙すればこうである。エメリー (Lewis Emery, Jr.) : 20分の5, ホイットニー&ホイラー (Whitney & Wheeler) : 20分の4, ホイットニー&サン (Whitney & Son) : 20分の3, プロデューサーズ・コンソリデイティッド・ランド&ペトロリアム社 (Producer's Consolidated Land & Petroleum Company) : 20分の4。クウィンチュプル・オイル社はチューナクリーク支流のイーストブランチとウェストブランチの間、ラファイエットタウンシップ (Lafayette township) との境界に至る山地に4,200エーカーの土地を所有していたが、相当部分をロイヤルティ4分の1でリースに出していた。また、同社は250エーカーの土地を8分の1のロイヤルティでリースしていた。油田開発についていえば、同社は生産井8本を所有していた一方、油井50本からロイヤルティを取

Reports: Mines and Quarries 1902, p. 743.

- 17) *Derrick's Hand-Book of Petroleum*, II, p. 256; *History of the Counties of McKean, Elk, Cameron and Potter*, p. 64. ジョーンズはブラッドフォード油田における大規模原油生産者であったが、詳しくは, *Ibid.*, pp. 369-370; Derrick Publishing Company, *Derrick's Hand-Book of Petroleum*, vol. I, *a Complete Chronological and Statistical Review of Petroleum Developments from 1859 to 1898*, Oil City, Penn., 1898, pp. 862-863 を参照。

得していた。同社の保有地ではリグの増加とともに夥しい数の坑井が掘鑿された。エメリーが同社のマネジャー、タイタスヴィルのウィーバー (W. R. Weaver) が財務担当を務めた。¹⁸⁾

●エメリー・オイル社 (Emery Oil Company)

この石油会社は1876年にエメリーによって設立され、1877年秋までに他の石油会社 (Hamsher & Weaver ならびに Emery, Patterson & Co.) を合併して成立したものである。共同経営者は、エメリー、ウィーバー、ハムシャー (L. E. Hamsher)、ハズバンド (W. C. Husband) であった。同社はブラッドフォード、タポート間とイーストブランチ沿いの平地にリースと所有権に基づき総計1,100エーカーの土地を保有しており、ここには計約250 BD を産出する29本の油井が存在した。また、同社は常時約2本の坑井を新規に掘鑿していた。エメリーがマネジャー、ウィーバーが財務担当であった。なお、この会社のプロパティは1897年にスタンダード・オイル社支配のサウス・ペン・オイル社 (South Penn Oil Company) によって買収されている。¹⁹⁾

●プロデューサーズ・コンソリデイティッド・ランド&ペトロリアム社

この石油会社は1875年に設立され、ブラッドフォード油田では古参のグループに属する。共同経営者の陣容は、社長がニューヨークのブッシュネル (C. S. Bushnell)、トレジャーがフリーマン (Joseph E. Freeman)、セクレタリーがクレイン (H. C. Crane) であった。同社は約1,200エーカーの土地を所有し、3,000エーカーを8分の1のロイヤルティでリースしていた。これらの土地には生産井95本があつて、生産量は計550 BD であった。メルヴィン農場 (Melvin farm) に掘られた油井は当初125 BD を産出したが、後に50 BD に減少した。ブラックスリー (L. C. Blackslee) が同社の事業マネジャーであった。同社は原油生産のみならず、パイプライン事業やニュージャージー州のベイヨン (Bayonne) で精油事業も行っていたが、トランクライン事業を計画するに及んで、1877年スタンダード・オイル社に買収された。²⁰⁾

18) *Derrick's Hand-Book of Petroleum*, II, p. 256; エメリーは、原油生産のみならず多角的に関連事業を展開した人物で、スタンダード・オイル社に対抗するための独立系トランクライン (trunk line: 長距離パイプラインのこと) 計画にも大きく関与した。また19世紀末、彼が関与した石油会社はブラッドフォードのクウィンチュブルトラクトに位置する736の油井からロイヤルティを取得していたという。*Derrick's Hand-Book of Petroleum*, I, pp. 659-660; *History of the Counties of McKean, Elk, Cameron and Potter*, pp. 354-356 を参照されたい。ウィーバーについては、*Ibid.*, pp. 407-408 を参照。

19) *Derrick's Hand-Book of Petroleum*, II, p. 256; Hidy & Hidy, *op. cit.*, p. 274; *History of the Counties of McKean, Elk, Cameron and Potter*, pp. 360-361. なお、1887年11月にエメリーらのフィラデルフィアの精油所はスタンダード・オイル社へ売却されている。*Ibid.*, p. 214.

20) *Derrick's Hand-Book of Petroleum*, II, p. 256; Hidy & Hidy, *op. cit.*, pp. 22, 169; Williamson & Daum, *op. cit.*, p. 422.

以上、4社の事例から確認される諸点はこうである。まず第一に、4社全てがブームの始まりつつあった1875～76年にかけて、当時の石油会社としては相当な面積のプロパティを伴って設立されていることである。出資に係わったのは地域の原油生産者が多かったが、彼等はブームが始まるやチューナクリーク流域の目ぼしい土地をまとめて先取りしていたのである。次に、ブラッドフォード・オイル社とクウィンチュプル・オイル社の事例で明らかなように、所有地をリースに出したり、リースした土地をサブリースに出したりする手法がよく採られていたことである。これは1860年代以来「石油会社」が採ってきた油田経営の手法で、原油採掘事業そのものは他者、すなわち群がってきたオイルマンが進めることになる²¹⁾。クウィンチュプル・オイル社が自社の油井数の6倍以上の油井からロイヤルティを得ていたことを想起されたい。これが第二。以上の点から、1870年代後半のブラッドフォード油田においても、いわゆる石油会社は地代収入を自己の経済的実現の支柱とすること、つまり土地所有の経済的利害に基づいて経営されていたことが窺えるのである²²⁾。石油会社は開発競争に生き残るためにも短期間のうちにプロパティを細分化し、多数の山師的なオイルマンを呼び込み、油田開発を活性化させる必要があった。これが、ブラッドフォードで苛烈を極めるオイルラッシュの背景であった。

II センサスに現れたオイルラッシュ

1 油田地帯における人口の趨勢

ドレイク油井成功直後の1860～1900年に至る、ペンシルヴェニア州内主要産油郡の人口趨勢を示したのが第2表である。人口の増減を全て油田開発に帰することはできないが、1890年前後に開発が進展したアレゲーニー郡とワシントン郡を除いて、それぞれの産油郡での原油生産量と人口には密接な関連があるといつてよい。たとえば、1860年代にはほぼ唯一の油田地帯として活況を呈したヴェナンゴ郡は、この10年間に2万3,000人も人口増が記録されている。1870年代に入って生産量を伸ばしたマッキーン、アームストロング、クラリオン、バトラー郡についても同様である。一方で、油田の相対的地位低下に伴う人口の減少も1870年代のヴェナンゴ郡などでみられる。本稿が対象とするマッキーン郡の人口趨勢には、Iで述べた激しい油田開発との関連がとりわけ鮮明に認められる。年を追って検討しよう。

まず、1860～70年にかけて、マッキーン郡の人口変化はほとんどないが、この時期の同

21) 詳しくは、豊田「19世紀アメリカ、オイル・リージョンにおける油田経営」を参照。

22) 1880年センサスでベッカムが指摘しているところからも、サブリースはブーム地では一般的であった。Peckham, *op. cit.*, p. 86. しかしながら、エメリー・オイル社とプロデューサーズ・コンソリデイティッド・ランド&ペトロリアム社について、そのことは明確とはいえない。ただ、この2社についてはスタンダード・オイル社に買収されることから別の興味深い側面がある。すなわち、この2社がリースおよびサブリースによってロイヤルティを取得していたとすれば、買収したスタンダード・オイル社もまたロイヤルティの受領者になったのではないかと、ということである。スタンダード・オイル社の原油生産部門参入とは、もちろん実際の掘鑿事業も伴ったであろうが、全体としてはこうした土地所有の経済的利害を多分に伴う形で進められたのではないだろうか。

第2表 ペンシルヴェニア州の主要産油郡における人口の推移

(単位：人)

郡	1860年	1870年	1880年	1890年	1900年
アレゲーニー (Allegheny)	178,831	262,204	355,869	551,959	775,058
アームストロング (Armstrong)	35,797	43,382	47,641	46,747	52,551
ビーバー (Beaver)	29,140	36,148	39,605	50,077	56,432
バトラー (Butler)	35,594	36,510	52,536	55,339	56,962
クラリオン (Clarion)	24,988	26,537	40,328	36,802	34,283
フォレスト (Forest)	898	4,010	4,385	8,482	11,039
マッキーン (McKean)	8,859	8,825	42,565	46,863	51,343
ヴェナngo (Venango)	25,043	47,925	43,670	46,640	49,648
ウォレン (Warren)	19,190	23,897	27,981	37,585	38,946
ワシントン (Washington)	46,805	48,483	55,418	71,155	92,181

(出典) U. S. Census, Population, 1900, vol. I, pp. 36-37.

郡の産業構造もほとんど変わらなかったと考えられる。すなわち、1860年の製造業センサスでは38の事業所が記録されているが、そのうちの31は製材所であった。1870年の産業センサスで記録されているのは25の製材所のみとなっている²³⁾。また、1860年の農業センサスと70年の産業センサスによれば、同郡の農場における既耕地・未耕地はそれぞれの年で約3万エーカー・7万エーカー、約2万8,000エーカー・5万1,000エーカーであり、70年の農場数は693を数えるのみであった²⁴⁾。農場数が少なく、従って耕地面積自体が少なく、さらに既耕地も少なかった、というのが同郡の農業の状態であった。経済地理学者ミラー(E. Willard Miller)は19世紀初頭からのこの地域の産業発展についてこのように述べている。「この地域は、水流による浸食作用によって深く開析された高く平らな台地によって特徴づけられている。ここは交通の便の悪さから、初期の西部移民には素通りされてしまった。ようやく最初の製材業者がペンシルヴェニア州中部、北部のマツヤツガが鬱蒼と繁った森林地帯に分け入り始めたのは、東海岸地方の森林が枯渇する兆しをみせるに及んでからのことである。1800年代前半の最初の入植から1875年に至るこの地域の経済は製材業によって特徴づけられ、それはある程度の商業には繋がったが製造業には結びつかなかった。さらに、森林資源の枯渇が進行しても農業が発展することはなかった。なぜなら、土壌は不毛で土地の凸凹が顕著であったからである。1875年の遅きに至っても、この地域にはなお開拓期の経済(pioneer economy)が一般的であったのである。」²⁵⁾ また、既に用いた1877年12月25日付デリック紙はいう。「今日でこそ喧騒に満ち、豊饒で鳴らすシティであるが、1861年当時は人口が300人にも満たない静穏な集落(hamlet)に過ぎなかったの

23) U. S. Census, Manufactures, 1860, p. 517; U. S. Census, Wealth and Industry, 1870, p. 726.

24) *Ibid.*, pp. 232, 361; U. S. Census, Agriculture, 1860, p. 122.25) E. Willard Miller, "Economic Geography of the Bradford Oil Region", *Economic Geography*, vol. 19, no. 2, April 1943, p. 177; 「[この地域の土地は] 農業に適さなかったから、荒地の下に油が見つかったことは幸運であった。」 *Derrick's Hand-Book of Petroleum*, II, p. 254.

である。』²⁶⁾ 前に述べたように、石油を求めての試掘は1860年代にも小規模とはいえ行われていたのだが、70年産業センサスの鉱業統計では、マッキーン郡での原油採掘活動は観測されていない²⁷⁾。

こうした「開拓期の経済」は1870年代の油田開発により一変する。マッキーン郡の人口は1870年の8,825人から80年の42,565人へと急増し、10年間で実に4.8倍にまで膨れ上がったのである。これは第2表でみた主要産油郡の10年間の人口増加のなかでは、アレゲーニー郡に次ぐ規模である。さらに、1870～80年にかけてのマッキーン郡の人口増加率はペンシルヴェニア州の郡全体のなかで最も高く、約3万4,000人という増加人数にしてもフィラデルフィアならびにアレゲーニー郡に凌駕されているのみであった²⁸⁾。アレゲーニー郡の人口増、これはいうまでもなく大都市ピッツバーグおよびその周辺地域の発展によるところが大きい。そもそも同郡での油田開発が本格化したのは1880年代末以降のことであり、ここを中心とするマクドナルド油田 (McDonald oil field) の原油生産量はブラッドフォード油田の生産量を大きく下回っていたから、人口増と油田開発の関連性は希薄だといつてよい²⁹⁾。続いて、マッキーン郡の1880年製造業センサスに目を移せば、145事業所が記録されており70年とは好対照を成す。そこでは製材業が67事業所と依然として最も多く、鋳物・機械 (15事業所)、ブリキ・銅・薄鉄板製品 (12)、樽 (11)、高性能爆薬 (10) と続く。全体として原油採掘関連の業種が多いことが窺える。製材業の発展にしても油井櫓の需要増が大きく寄与しているものと考えられる³⁰⁾。

次に、マッキーン郡を構成するタウンシップなどの地方行政単位にまで立ち入って、人口の推移をみたのが第3表である。行政区分地図として第2図を併せて参照されたい。1860～70年にかけて郡人口に大きな変化はなく、郡内行政単位の人口をみても、さほど大きな動きは認められない。1880年になると、どの行政単位も全般的な人口増加を経験しているが、特にブラッドフォードを中心とした人口の集中が著しい。ブラッドフォードタウンシップとシティの関係について少し説明した上で、この時期の人口をみていこう。自治体としてのブラッドフォードは、1839年にタウンとなった記録がある。公刊された人口センサスはタウン、集落、村落 (village) といった自治町村をタウンシップに纏めていたか

26) *Ibid.*

27) U. S. Census, *Wealth and Industry*, 1870, p. 786.

28) U. S. Census, *Population*, 1880, p. 406. あのゴールドラッシュの発祥の地として名高いカリフォルニア州エルドラド (El Dorado) 郡の人口も1850年までに2万人程度の増加が認められるに過ぎないのである。同郡の人口は以下の通り。1850年：2万57人、1860年：2万562人。なお、1850年センサスに収録されている1852年のカリフォルニア州センサス (*Population and Industry of California, by the State Census for the Year 1852*) によると、同郡の人口は推定で4万人とされているが、推定値をどのように算出したのか判然とせず信頼できない。U. S. Census, *Population*, 1850, p. 969; 1860, p. 28.

29) Department of Interior, Census Office, *Report on Mineral Industries in the United States at the Eleventh Census: 1890*, Washington D. C.: GPO, 1892, p. 438; Department of Commerce and Labor, Bureau of the Census, *Special Reports: Mines and Quarries 1902*, pp. 743-744.

30) U. S. Census, *Manufactures*, 1880, p. 347.

第3表 マッキーン郡におけるシティ、バラ、タウンシップ人口の推移

(単位：人)

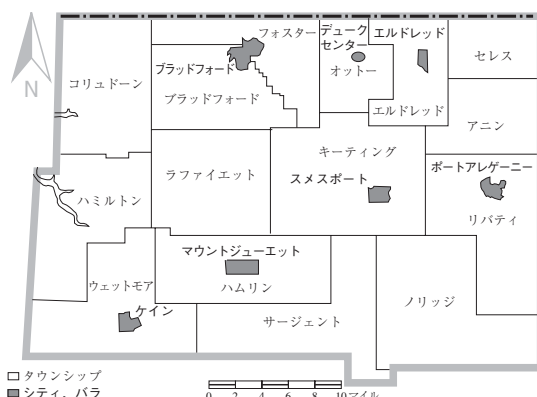
	1860年	1870年	1880年	1890年	1900年
アニン (Annin) ¹⁾	—	760	1,089	1,188	914
ブラッドフォードシティ	—	—	9,197	10,514	15,029
第1区	—	—	2,622	1,996	1,810
第2区	—	—	1,704	2,254	3,089
第3区	—	—	2,068	2,359	2,987
第4区	—	—	1,520	2,248	2,907
第5区	—	—	1,288	1,657	2,249
第6区	—	—	—	—	1,987
ブラッドフォード	1,515	1,446	2,699	3,246	2,938
セレス (Ceres)	1,358	798	975	1,207	1,106
コリュドーン (Corydon)	190	169	154	837	260
デュークセンター (Duke Centre) バラ ²⁾	—	—	2,068	—	—
エルドレッド (Eldred) バラ	—	—	1,165	1,050	963
エルドレッド	754	897	2,078	1,588	1,493
フォスター (Foster) ³⁾	—	—	5,373	3,107	1,793
ハミルトン (Hamilton)	155	120	539	1,734	1,596
ハムリン (Hamlin)	180	121	330	1,722	3,484
ケイン (Kane) バラ ⁴⁾	—	—	—	2,944	5,296
第1区	—	—	—	—	986
第2区	—	—	—	—	1,793
第3区	—	—	—	—	1,118
第4区	—	—	—	—	1,399
キーティング (Keating)	1,374	1,435	2,974	2,877	2,845
ケンダル (Kendall) バラ ⁵⁾	—	—	2,689	1,937	—
第1区	—	—	—	867	—
第2区	—	—	—	1,070	—
ラファイエット (La Fayette)	214	591	1,266	1,913	1,690
リバティ (Liberty)	1,305	1,093	2,029	2,174	1,694
マウントジューエット (Mt. Jewett) バラ ⁶⁾	—	—	—	—	1,553
ノリッジ (Norwich)	322	257	431	1,109	978
オットー (Otto)	338	298	4,277	2,429	1,643
ポートアレゲーニー (Port Allegheny) バラ ⁷⁾	—	—	—	1,230	1,853
サージェント (Sergeant)	136	119	922	948	1,057
スメスポート (Smethport) バラ ⁸⁾	313	231	872	1,150	1,704
シップエン (Shippen) ⁹⁾	938	—	—	—	—
ウェットモア (Wetmore)	80	721	1,438	1,959	1,454

(出典) U. S. Census, Population, 1870, p. 252; 1880, p. 314; 1890, vol. I, p. 299; 1900, vol. I, p. 343.

(備考) シティ (city) とバラ (borough) 以外は全てタウンシップ (township) である。

1) 1864年セレス、リバティから分離して成立。2) 1870年代オットーから成立 (センサスにはブラッドフォードから成立とあるが、正しくはこうである)。1888年オットーへ編入。3) 1880年ブラッドフォードから分離して成立。4) 1886年ウェットモアから成立。5) 1870年代ブラッドフォードから成立。1890年代ブラッドフォードシティに編入。6) 1890年ハムリンから成立。7) 1882年リバティから成立。8) 1870年以前はキーティングに含まれている。したがって1860、70年の郡人口を求める際には全体から313、231をそれぞれ差し引く必要がある。9) 1864年キャメロン郡へ編入。

第2図 マッキーン郡のシティ、バラ、タウンシップ（1890年）



(出典) *History of the Counties of McKean, Elk, Cameron and Potter*, pp.15-16.

ら、1870年以前のブラッドフォードタウンシップ（第3表）には、タウンとしてのブラッドフォードの人口が含まれていることになる。その後1873年2月にバラ、79年1月にはシティの承認を州が与えたことで、翌年の第10回センサスからは5区で構成される自治体として単独で扱われるようになった³¹⁾。以後、1900年に至るまで、ブラッドフォードシティはマッキーン郡唯一のシティとして発展していくのである。

1870～80年にかけてのブラッドフォードタウンシップへの人口集中は明白である。すなわち、タウンシップの人口は1,446人から2,699人に増加した。シティが成立して人口は9,197人を数えた。1880年にブラッドフォードタウンシップから分離して成立したフォスタータウンシップは5,373人となった。同様に1870年にブラッドフォードから成立したケンドールバラは2,689人であった。これらを合計すると1万9,958人となるから、1870～80年までに新旧のブラッドフォードタウンシップの範囲内へ移入してきた人口は1万8,512人であったとみてよい。これは、この間のマッキーン郡増加人口の約55%に相当する。また、ブラッドフォードタウンシップからは外れるが、第1図でみた油層と重複・近接するタウンシップ（オットー、エルドレッド、キーティングなど）でも人口増加が認められる。他方で、ハムリンやハミルトンなどの非産油タウンシップの産業の中心は依然として製材業であって、小規模の人口増加を経験したに止まった³²⁾。

なお、ブラッドフォード油田への人口集中の細かい時期については10年毎のセンサスではよく判らない。それには既にみた地方紙の報道などから推定する他ないが、1870年代後半から本格化した油田開発と歩調を合わせて進んだものと考えられる。ミラーによれば、「1876年の〔ブラッドフォード〕集落の人口はおおよそ550人であった」³³⁾ こと、デリック

31) <http://www.phmc.state.pa.us/bah/dam/counties/pdfs/McKean.pdf> (2010年4月19日確認) ; *History of the Counties of McKean, Elk, Cameron and Potter*, pp. 112, 172.

32) Miller, *op. cit.*, pp. 186-187.

33) *Ibid.*, p. 184. ここでは集落 (hamlet) といわれているが、正確にはバラであろう。

紙が1877年2月15日付で「目下ブラッドフォード〔バラ〕の人口は3,500人程度であり、日に日に増加している」³⁴⁾と報道していること、ニューヨークタイムズ紙が「豊かな石油貯留岩層が〔ヴェナング郡の油層より〕数百フィート下で発見されていた。しかしながら、この〔ブラッドフォード〕油田の真の重要性が認識されるのは、ようやく1877年になってからのことである。マッキーン郡への記念すべきラッシュはそれから始まったのだ」³⁵⁾と回顧したこと、などは、ある程度の根拠になり得るだろう。人口増加は一定のスピードで進行したのではなくて、1870年代後半に一挙に集中して発生したものだと考えられる。これについては、次章で個々のオイルマンを分析する際に再確認する。

最後に、ブラッドフォード油田の生産量が減少局面に入る1880年代初頭以降についてみておこう。第1表ならびに第2表にみられるように、急速な生産量の減少にもかかわらず、マッキーン郡の人口は1900年に至るまで着実に増加している。また、第3表からはブラッドフォードシティの人口もこの間増加したことが窺える。石油目当てに急膨張した人口が、減少するどころか増加した背景は何であったのか。第一に考えられるのが、オイルラッシュの継続である。例えば、第3表のケインバラは1880年代から人口が増加したことが判る。これは1880年代後半から、本来のブラッドフォード油田から少し離れたウェットモアタウンシップで油田(Kane field)が発見されたためである³⁶⁾。確かにマッキーン郡全体としての原油生産量は急減していたが、その内部ではこうした散発的なラッシュが繰り返し起こり人々を引き寄せていたと考えられる。第二は、新たな産業を伴う地域の拠点としてブラッドフォードが発展したことである。ここではミラーの議論を紹介しておこう。「1881～1906年にかけて石油産業の重要性は低下していったが、この時期が全般的な文化的衰退の時代であったわけでは決してない。石油ブームは地域に莫大な富をもたらし、その大部分はブラッドフォードに集中した。ところが、ブームの最中には、そうした富を文化的発展のために使用する機会はほとんどなかったのである。また、ブラッドフォードの市民の多くは初期の石油タウンの消耗しきった状況を目の当たりにしていたから、同様の事態が彼等のシティに起こることはなんとしても避けたいと考えた。こうして1882年には商工会議所が設立されたが、その特別の目的は短命の石油産業に取って代わる新しい産業を奨励することであった。その後の20年間には多くの産業がブラッドフォードに誘致された。煉瓦造りの木工工場や金属加工工場が建設されたことがよい例である。同様に、最初の堅牢な住宅(substantial homes)が1885年頃に作られた。一方、市民の誇りと富の結合は近代的な病院、児童養護施設、娯楽施設、図書館といったような公共施設をもたらした。かくして、発展(the progress)は人々の文化生活のなかのみならず、目に見える景観においても表されたのである。」³⁷⁾

こうした人口増が続いた一方で、「初期の石油タウン」の如く人口が減少してしまった

34) *Derrick's Hand-Book of Petroleum*, II, p. 242.

35) *The New York Times*, August 29, 1881.

36) Williamson & Daum, *op. cit.*, p. 556.

37) Miller, *op. cit.*, p. 185.

ところも第3表で確認できる。フォスタータウンシップやオットータウンシップがそれぞれ、先に述べたケインバラとは対照的である。「より小規模な石油開発拠点はブラッドフォードのようにうまくやれなかった。そうした町は普く人口を減らし、多くは完全に消滅してしまった。町は石油のうえに作られ、それが枯渇するや生活手段を失ったのである。1900年にもなると、かつて数千人の住人がいた多くの町の跡を見つけるのは難しくなった。それらは、きのこ町として叢生し何を残すわけでもなく一夜にして消え去ってしまったのである。」³⁸⁾ このミラーの文章は、やや誇張の気味があるにせよ、石油だけが頼りのいわば鉱山キャンプとして成立した町の儚い運命を典型的に表現したものである。

以上、ブラッドフォード油田の中心地であるマッキーン郡の1900年に至る人口動静をみた。1870年代前半までの地域の停滞的状况、70年代後半からの本格的な油田開発に伴う人口の急膨張、油田開発拠点としてのブラッドフォードシティへの人口集中、原油生産量の減少期におけるラッシュの継続とブラッドフォードの発展、これらが明らかになった諸点である。資料としては、公刊された連邦センサスを随所に利用してきた。基礎資料のセンサスではあるが石油産業史研究においては、ミラーの研究を除いて、これまでほとんど利用されてこなかったといつてよい³⁹⁾。中小のオイルマンが重要な役割を演じたと考えられる、アメリカ石油産業の原油生産部面を捉えようとするとき、したがってオイルラッシュを語ろうとするときには、こうした基礎的な事実は一丁に押さえておかねばならない。

2 マッキーン郡へやってきたオイルマン

1870年代に一攫千金を夢見てマッキーン郡にやってきた人々は、どのような人々であったのだろうか。何も石油を求めた人ばかりではなかったであろう。石油ブームに乗じてなんらかのビジネスをやろうとした者もいただろうし、夫に同行してやってきた女性・子供も多かっただろう。このように様々な背景を抱えながら移入してきた人々全てを採り上げて、オイルラッシュの全貌を再構成する、というような作業はとても本稿では出来そうにない。ここでは、1880年時点で原油採掘に係わっていた人々を対象を限定し、次の四つの側面から彼等の具体像に迫りたいと考える。まず第一に、1880年時点のマッキーン郡で原油採掘に係わっていた人々が具体的にどのような仕事に就いていたのかを検討する。換言すれば、ブラッドフォードの石油ブームの絶頂期を切り取って、オイルマンの職業分布を整理する。そのうえで他の産油郡との比較を通じてオイルラッシュの特質を浮き彫りにしたい。第二に、オイルマンの職業と彼等が所属した世帯の形態との関連について考える。つまり、家族でやってきたのか、それとも単身でやってきたのか、そのことに職業が関係しているのか、という点について検討する。第三に、彼等の年齢を明らかにし、年齢と職業との関連性を一瞥する。第四に、彼等の出身地を確定する。そのうえで職業ごとの出身地構成が意味するところを考える。

38) *Ibid.*

39) 何度か本文でも引用したミラーによる研究は、限定的ではあるものの人口センサスを用いてブラッドフォード油田の開発過程を語った希少なケースである。*Ibid.*, pp. 184-187.

第4表 ペンシルヴェニア州産油郡における原油採掘関連の職業分布 (1880年)

(単位:人)

郡	原油生産者 (oil producer)	掘鑿人 (oil well driller)	採油人 (oil pumper)	油井労働者 (works on oil wells)	請負業者 (oil well contractor)
アレゲーニー	12	22	0	3	1
アームストロング	80	21	2	129	0
ビーバー	46	15	40	5	0
バトラー	240	54	771	22	2
クラリオン	238	88	377	15	1
フォレスト	13	4	16	0	0
マッキーン	806	1,056	61	157	69
ヴェナング	377	139	205	50	0
ウォレン	60	24	1	12	0
ワシントン	0	1	0	0	0

(出典) U. S. Census (MSS), Population, Allegheny County, Armstrong County, Beaver County, Butler County, Clarion County, Forest County, McKean County, Venango County, Warren County, Washington County, Penn., 1880. センサス調査票のデータは Ancestry.com から得た。以下も同様。

(備考) 調査票の職業表記は様々であるため、同一と考えられるものは、まとめてカウントしている。例えば、oil producer には pet. producer などが、oil driller には oil drilling などが含まれている。contractor & driller (マッキーン郡: 1人) は請負業者に含めた。

第4表は、1880年人口センサスの調査票に基づいて、ペンシルヴェニア州主要産油郡における原油採掘関連の職業分布を示したものである。ここでは、当該職業に特定可能な人間だけを抽出したため、全体としての人数が少なくなっている。例えば、マッキーン郡で4,310人が確認される労働者 (laborer) のなかには、油井での作業に従事した者も含まれているだろう。例えば、laborer on oil wellsといった表記もみられるのである。そうした制約を踏まえて、原油採掘関連として特定できるものを列挙すると、原油生産者、掘鑿人、採油人、油井労働者、請負業者ということになる。これらの職業について厳密に定義することは困難であるが、留意すべき点も含めて大雑把に整理しておこう。まず、原油生産者とは文字通り生産井を保有している者のことである。彼らのなかには、前述のように多数の油井を保有する石油会社のパートナー等も含まれるが、原油を生産する経営主体の数としては、そうした会社は少数派であった。すなわち、個人あるいは家族で事業を行っている小規模・零細な経営形態が圧倒的多数を占めたのである⁴⁰⁾。掘鑿人については賃金労働者か、それとも独立自営の者が判然としない。ただ、いうまでもなく、生産井を保有するには至っておらず、石油を求めて日々掘鑿作業に従事している者である。採油人とは、自

40) 20世紀に入ってからデータであるが、1910年の連邦鉱業センサスでは、調査対象となった4,772の原油生産業者のうち約85%が賃金労働者を雇っていないか、雇っていてもその数は1～5人という状況であった。Department of Commerce, Bureau of the Census, *Thirteenth Census of the United States taken in the year 1910*, Vol. 11, *Mines and Quarries 1909*, Washington, D. C.: GPO, 1913, p. 35.

噴井段階を終えた油井の人工採油作業に従事する者のことである。賃金労働者が含まれるとはいえ、会社のパートナー自らが作業に当たっていることも否定できない。その点で、原油生産者との区別は曖昧なところがある。油井労働者は賃金労働者であることは間違いないが、掘鑿人ならびに採油人との区別が曖昧である。また、掘鑿・採油に係わる補助労働を行っていた者もいただろう。最後に、請負業者とは坑井の掘鑿作業を丸ごと請け負う会社・個人を指している。したがって、表記にはcontractor & drillerというような例もあり、掘鑿人との区別が判然としない気味がある。

これら5職業については、定義が截然としない面があるのは否めない。ただ、ここでひとついっておきたいのは次のことである。すなわち、多少の温度差はあるものの、従来の研究が原油生産者のことを語る際、原油生産者は原油生産者でなかったか、ということである。原油生産者とはいわば山師的な存在で、石油が出たという情報に接するや一攫千金を狙って油田地帯に急行し、土地をリースして可能な限りの井戸を掘り、競争的な生産を繰り返す、そうした存在として措定され、その中身についてはほとんど等閑視されてきたのではなかったか⁴¹⁾。そのような意味では、難点はあるにせよ、センサスから5職業が析出された、という点は重要である。我々が原油生産部面の具体像をより明確に、立体性をもって知ることができるからである。以下、第4表から確認される諸点を整理してみよう。

第一に、原油生産者数ではマッキーン郡が806人と圧倒的に多いことである。これは、当時のブラッドフォード油田の原油生産量を考えれば自明のことであるが、以下続くヴェナンゴ、バトラー、クラリオン、アームストロング郡とは大きな懸隔がある。これらの人々は掘鑿の結果、原油を獲得したいわば成功者である。ペンシルヴェニア州の外れで多くの人々が成功したという事実は、一攫千金を目論む人々をマッキーン郡へ向かわせる大号令となったに違いない。第二に、マッキーン郡では原油生産者数を上回る1,056人もの掘鑿人が存在していることである。これを他の産油郡と比較すると、原油生産者の場合よりも際立って多いことが判る。すなわち、掘鑿人数で次に多いのはヴェナンゴ郡であるが、僅か139人に過ぎないのである。これは当然のことながら、既知の油田が掘り尽くされて新規掘鑿が急減したためである。多数の原油生産者に加えてそれをも凌駕する掘鑿人が存在していること、これこそが進行中のオイルラッシュのメルクマールであったといえる。次に、採油人についてはバトラー郡が771人と圧倒的に多く、そこで人口採油が広範に行われていたことを示している。以下、クラリオン、ヴェナンゴ郡と続くが、原油生産者および掘鑿人の事例とは異なり、マッキーン郡では61人を数えるのみである。圧倒的多数の原油生産者数と少数の採油人の存在、これはIで述べた自噴井の一般性を傍証するものといえよう。既知の南方油田では油井坑内にポンプを入れる必要があったが、ブラッドフォー

41) そもそも、公刊センサスの職業統計においても原油採掘業は一括して扱われている。職業名（合衆国における就業者数；ペンシルヴェニア州における就業者数）は以下の通り。1870年：oil well operators and laborers (3,803; 3,567), 1880年：oil well operatives and laborers (7,340; 6,902) U. S. Census, Population, 1870, pp. 682-683; 1880, pp. 750, 788.

ドではほとんど必要なかった、この事実も人々を引き寄せた要因のひとつであった。これが第三点である。第四に、油井労働者と請負業者についてである。後者はマッキーン郡で69人を確認できるのがほぼ全てであるといつてよい。これも掘鑿人と同様の文脈で、掘鑿作業請負の需要が増加したブラッドフォード油田に集中したものと考えられる。油井労働者については、どういった内容の仕事をしていたのか明らかにし得ないが、順当にマッキーン郡が154人と最も多い。なお、129人を記録しているアームストロング郡については、採油人が異常に少ないことから、油井労働者のなかに採油人が含まれている可能性を念頭におく必要がある。以上、ここでは、オイルラッシュの時期と生産のピークを経過した時期についての、油田地帯における職業分布の特質を明らかにした。今後、さらに対象時期・地域を広げ調査票を精密に吟味すれば、油田の開発過程、つまり油田のライフサイクルと職業分布との対応関係をより明瞭にすることができるだろう。

それでは本章の第二の課題に移ろう。オイルマンの職業と世帯の形態についてである。はじめに、マッキーン郡全体としての特質を示しておきたい。1880年の同郡で観察される特徴的な世帯内地位の人口分布として、親族以外の者が9,691人居住していたことがあげられる。彼等がマッキーン郡では人口の約23%を占めたのに対して、他の産油郡では5～10%程度であった。絶対数としても、アレゲーニー郡を除いて第4表の産油郡のなかで最も多い。マッキーン郡に続くのはワシントン郡の3,536人と、かなりの懸隔が認められる。さらに、産油郡のなかでは唯一、親族以外の者の人口が世帯主人口(8,552人)を上回っていた。ペンシルヴェニア州全体でみても前者の人口は後者の約2分の1である。親族以外の者とは、平たくいって、ほとんど全てが単身で居住する下宿人(boarder)であった。郡が持つこのような特質を踏まえうえて、職業ごとの検討に入ろう。以下では、マッキーン郡における原油採掘関連就業人口の大部分を占める原油生産者および掘鑿人に限定して検討を進める。⁴²⁾

1880年の人口センサス調査票に基づいて世帯内地位をみると、原油生産者806人のうち世帯主が516人、親族以外の者が253人で、掘鑿人1,056人のうちそれぞれ399人、603人となっている(第5表参照)。ここからは、原油生産者と掘鑿人双方で下宿住まいをする者がかなり存在したこと、ただ両者を比較すれば掘鑿人の方が下宿住まいとなる傾向が強かったことが窺える。合計としては世帯主人口が多くなっているが、表中のヴェナング郡における分布を踏まえれば、マッキーン郡の親族以外の者の存在感は大きかったとみるべきである。なお、親族以外の者のうち原油生産者の約60%(152人)、掘鑿人の約72%(433人)が未婚者であった。人数としては掘鑿人の方が圧倒的に多いが、比率からみれば少し掘鑿人の方が高いに過ぎない。これによって職業と既婚・未婚との関連を断定することは困難である。また、親族以外の者でかつ既婚者が原油生産者:81人、掘鑿人:132人と無視し得ない数値を示しているが、彼等は家族を旧居住地に残して単身、油田地帯を訪れた者だと考えられる。総じて、マッキーン郡では数多くの親族以外の者が下宿人として認め

42) このパラグラフの内容は、U. S. Census, Population (MSS), 1880 に基づいている。

第5表 世帯内地位の分布 (1880年)

(単位：人)

	原油生産者		掘鑿人	
	マッキーン郡	ヴェナンゴ郡	マッキーン郡	ヴェナンゴ郡
総 数	806	377	1,056	139
世 帯 主	516	337	399	96
既婚	483	329	384	96
未婚	22	3	19	0
親族以外の者	253	14	603	11
既婚	81	4	132	5
未婚	152	10	433	4

(出典) U. S. Census, Population (MSS), McKean County, Venango County, Penn., 1880.

(備考) 「世帯主」と「親族以外の者」の範疇に入らない者は省略している。

られること、彼等は原油採掘関連の職業に大きく関与していること、また彼等が就く職業としては掘鑿人の比重が大きいこと、彼等は圧倒的に未婚者が多いこと、これらがここで確認される諸点である。急ごしらえの下宿屋に単身のオイルマンが大挙してやってきて、掘鑿人としての活動を始める、そうしたオイルラッシュの光景が想起される⁴³⁾。

第三の課題として、1880年センサス実施時におけるオイルマンの平均年齢を明らかにしておこう。マッキーン郡のセンサス調査票を集計して平均年齢を求めると、原油生産者(806人)：36.3歳、掘鑿人(1,055人)⁴⁴⁾：30.7歳、という結果を得た。1880年には掘鑿人の方が原油生産者よりも5.6歳若かったということになる。この事実が意味することは何か。詳しくは後述するが、油田地帯へやってきた人々は直ちに原油生産者になれたわけではない、ということである。ブラッドフォード油田がいかに優れた油田であろうとも、土地を確保して坑井を掘鑿し石油を当てるにはそれなりの金(数千ドル)が必要であったし、それなりのノウハウも必要であったからである⁴⁵⁾。掘鑿人である間は、いわばこれらの準備

43) 多数の下宿屋 (Hotel, House, etc.) の存在についてはセンサス調査票ならびに、以下のディレクトリで確認できる。J. H. Lant, *Titusville, Oil City, Franklin, Warren, Bradford, Olean, & C. Directory for 1878-9*, Titusville, 1878, pp. 260-359. この下宿屋については以下のような興味深い点が想起される。油田地帯におけるオイルマンの生活は、原油採掘に係わることが全てではない。彼等はブラッドフォードにやってきて、まず雨露をしのぐための住居を確保せねばならない。食べ物にもありつかなくてはならない。また、油井で働く、坑井を掘る、といっても、実際にそのような活動をするには、何らかの手はずを整える必要がある。そのような需要を狙って、石油で稼ぐというよりもむしろ、石油目当てにやってきた人をカモにするような商売をした人間も多かっただろう。そうした存在として、またオイルマンの世話役的な存在として、多くの下宿屋の主人が考えられる。1880年センサスによれば、掘鑿人が集中して下宿しているケースや、出身地・出身国ごとに下宿人がかたまっているケース、また第7表でも確認されるが、下宿屋の主人が原油生産者を兼ねていると思われるケース、などが散見されるのである。こうした、殺到してきたオイルマンの周辺に張り巡らされていた仕組み、つまり、オイルマンを支持しつつ自らも経済的実現をはかる仕組み、がオイルラッシュの経済的条件として重要であることはいうまでもない。他日に果たすべき課題としたい。

44) 総数から1人欠けているのは、調査票に生年記載がない者である。

第6表 マッキーン郡におけるオイルマンの出身地（1880年）

●アメリカ生まれ

出身州	原油生産者	掘鑿人
アラバマ	0	1
アーカンソー	1	0
カリフォルニア	1	1
コネティカット	9	2
イリノイ	2	3
インディアナ	1	2
アイオワ	3	1
ケンタッキー	1	0
メイン	22	8
メリーランド	0	6
マサチューセッツ	18	5
ミシガン	4	2
ミズーリ	0	1
ニューハンプシャー	2	0
ニュージャージー	4	6
ニューヨーク	237	251
ノースカロライナ	0	2
オハイオ	32	33
ペンシルヴェニア	316	523
ロードアイランド	4	1
テネシー	1	0
ヴァーモント	9	1
ヴァージニア	3	5
ウェストヴァージニア	1	1
ウィスコンシン	3	3
計	674	858

●移 民

(単位：人)

出身国	原油生産者	掘鑿人
カナダ	54	69
イングランド	17	10
フランス	1	0
ドイツ	19	10
アイルランド	24	46
スコットランド	8	12
スウェーデン	1	0
ウェールズ	1	0
計	125	147

(出典) U. S. Census, Population (MSS), McKean County, 1880.

(備考) 出身地の未記入といった不備のため利用できなかった調査票は以下の通り。アメリカ生まれの原油生産者：1人，移民の原油生産者：6人，移民の掘鑿人：51人

期間として捉えられる。5.6歳の年齢差はオイルマンが一樣ではなかったことを傍証するとともに，若い掘鑿人の原油生産者予備軍の性格を示しているものと考えられる。

最後に，1880年人口センサス調査票を利用して，マッキーン郡におけるオイルマンの出身地についてみておこう。第6表は，アメリカ生まれの者と外国生まれの移民とを区別したうえで，原油生産者と掘鑿人それぞれの出身州あるいは出身国を示したものである。ここから明らかなように，原油生産者，掘鑿人問わず出身地はペンシルヴェニア州とニューヨーク州が他を圧倒している。両州を合わせると，総数に占める割合は原油生産者：約69%，掘鑿人：約77%，となる。アメリカ生まれのなかでは，西隣のおハイオ州出身者が次に多い人数を示していることを考え合わせると，石油を求めて殺到してきたのは近隣を出身地とする人々であったといってよい。当時のことであるから，人々のなかには故郷を離れて転々と移動した者も多かったであろう。その点からすると，オイルマンは近隣から油田地帯へやってきた，と単純にいうことはできない。ただ，少なくとも彼等にとって，ペンシルヴェニア州とニューヨーク州の境に位置するブラッドフォード油田は，土地勘の全

45) 油井掘鑿のコストなどについては差し当たり，豊田「オイル・ラッシュ」を参照されたい。

くない新天地ではなかった。移住していたとしても、故郷に残った顔なじみの人々との手紙のやりとりを通じて、あるいはそうした人々に誘われて油田に向かったことも考えられる。これが第一点。次に移民についてであるが、彼等はそれぞれの職業の約15%を占めているに過ぎない。出身国は多い順にカナダ、アイルランド、ドイツ…と続くが、基本的に旧移民の顔ぶれである。カナダ人が多いのは五大湖周辺地域であるという地理的側面が寄与しているように思われる。また、アイリッシュの掘鑿人が比較的多いことが気にかかるが、全体からみたシェアは僅かであり職業との関連性を議論することは難しいだろう。以上が第二点である。第三点目に、アメリカ生まれの原油生産者のなかに計64人のニューイングランド地方出身者が存在することがあげられる。掘鑿人では17名に過ぎない。この人数の差が持つ意味は明確とはいえない。ただ、全体としてのこの地域の出身者には、移民の場合でもいえることであるが、石油云々というよりも西に向かう親の移住に帯同して油田の近隣にやってきた者がいただろう。一方で、そうではなく、親を故郷に残して自発的に油田にやってきたケースも考えられる。

以上、本節では三つの側面からマッキーン郡におけるオイルマンの具体像を考察した。ここで明らかになったことを手短かに整理すればこうである。他の産油郡とは著しく異なった原油採掘関連の職業分布、わけでも多数の原油生産者と掘鑿人の存在、親族以外の者が多数下宿屋に居住しており特に掘鑿人にその傾向が強いこと、一般的に掘鑿人は原油生産者よりも平均年齢が若く次なる原油生産者を予感させること、彼等の出身地は油田の近隣諸州が圧倒的に多く移民は少なかったこと、以上である。

III オイルマンのバックグラウンド

ここでは、郷土史(J. H. Beers & Co., *History of the Counties of McKean, Elk, Cameron and Potter, Pennsylvania with Biographical Selections*, Chicago, 1890)に書かれた伝記をベースに、センサスではよく判らない側面にも言及してオイルマンのバックグラウンドに迫りたい。ただ、本稿でマッキーン郡におけるオイルマン全員の伝記を分析する余裕はない。検討対象は、郷土史がブラッドフォードタウンシップおよびブラッドフォードシティ(以下、ブラッドフォードと略す)関係者の伝記に充てた箇所とし、さらにそこから以下の条件を全て満たした者50人に限定した。すなわち、1870年、1880年、1900年のいずれかの人口センサス調査票上に存在が確認できる者、伝記・センサスいずれかにおいて第4表およびそれに準ずる原油採掘関連の職業にあったと確認できる者、石油開発が徐々に進み始める1870年以降にブラッドフォードへやってきた者、以上である⁴⁶⁾。第7表は、その50人を列挙するとともに、それぞれについてセンサスで特定可能な情報、および伝記に基づく南方油田での原油採掘活動等を付記したものである。以下では、そこから読み取ることのできる諸点を確認しよう。なお、50人の年齢構成と出身地についての説明は、前章でマッキーン郡

46) 伝記の叙述のなかでブラッドフォード来訪年が特定できなくても、1870年以降の来訪が確実である場合は抽出リストに加えた。

全体を対象にして検討を加えたので割愛する。移民の割合が少し高くなっていることなどの相違があるが、原油生産者が中心になっているため平均年齢が高いこと、出身地はニューヨーク州とペンシルヴェニア州が過半を占めること、など基本的に同様の特徴がみられるといってい⁴⁷⁾。

さて、1890年郷土史より抽出した50人の職業構成を1880年センサス段階でみると、原油生産者：27人、請負業者：3人、掘鑿人：1人、原油生産会社現場監督：1人、であった。さらに1890年郷土史段階では、原油生産者：36人、原油生産会社役員：3人、原油生産会社現場監督：1人、原油生産者兼請負業者：1人、であった。このことには注意を要する。なぜなら前章でみたように、現実としては、原油採掘関連のなかには複数の職業、わけでも多くの掘鑿人が存在していたからである。ほとんど原油生産者しかいないという状況は考えにくい。この背景としては、当時のアメリカの郷土史がいわば「成功者の記録」となっていたことがある。一般的に、この類の郷土史の伝記に掲載されたのは比較的裕福な、地方の名士であったことが多い⁴⁸⁾。要するに、抽出された50人というのは、大部分が原油生産者から構成される成功者としてのオイルマンであったと考えられる。逆に掘鑿人の掲載が1人のみであることは、掘鑿人の経済的・社会的な立場を暗示するものといえよう。以上が第一点である。

第二に、彼等のブラッドフォード来訪年について、それが判明した37人から平均を求めると1878年ということになる。これは、前述した1870年代後半の短期間で人口集中を裏付けるものといえる。彼等は石油ブームに沸くブラッドフォードに惹き付けられたのである。

第三に、50人のオイルマンの過去の活動についてである。ここでは、彼等が南方油田で原油採掘関連事業に関与していたことがあるか、また、関与していたとすれば具体的にどのような仕事をしていたのか、という点に絞って検討してみよう。表から判ることは、50人中32人が1860～70年代に、ヴェナンゴ郡をはじめとする油田地帯で原油採掘関連の活動をしていたことである。それでは、彼等は一体どのような仕事をしていたのか。郷土史には「石油事業 (oil business)」を行っていたなどという曖昧な記述がある一方、どこかで雇われて井戸を掘った、あるいは油井・油田で働いていた、という記述が比較的多くみられる。自前の坑井を掘鑿するに至った者にしても、それ以前は油田で雇われて働いていた形跡が認められる。さらに、南方油田で一旦は成功したとみられるエメリーのような人物も、破産に陥って捲土重来を期する過程でブラッドフォードを訪れていた。これらの事実は重要である。前章で分析した1880年人口センサス調査票だけでは、彼等の出身地は判っても、それからの彼等の足取りは定かでないからである。1890年郷土史は、個人の略歴・職歴を書いているからその点を一定程度補ってくれる。なお、完璧を期するのであれば、

47) 50人の平均年齢は39.6歳であった。出身地はニューヨーク州とペンシルヴェニア州合わせて27人で、全体の約53%を占めた。移民は12人で約24%であった。

48) 岡田泰男『アメリカ公有地制度史の研究——ネブラスカ州ゲイジ郡——』陽樹社、1973年、283-284頁。

第7表 ブラッドフ

	氏 名	生 年	出 身 地		ブラッド フォード 来訪年	1880年センサス
			郡(市)	州(国)		
1	Adsit, H. H.	1841	Chautauqua	N. Y.	1876	supt. oil co.
2	Anderson, Abraham	1824	—	(England)	—	farmer
3	Bishop, John T.	1836	—	(England)	1877	bookkeeper
4	Blomer, A. Henry	1846	(Philadelphia)	Penn.	1870	oil producer
5	Byrom, Henry ¹⁾	1828	Lancashire	(England)	1885	oil producer
6	Casterline, C. L.	1851	Allegany	N. Y.	1877	laborer
7	Chambers, William	1839	Erie	Penn.	1877	oil producer
8	Chattle, Thomas ²⁾	1819	Orange	N. Y.	1884	oil producer
9	Coburn, Alfred W.	1838	(Louisville)	Ky.	1878	agent for boilers & engines
10	Cochran, Allan ³⁾	1820	—	(Scotland)	1882	oil producer
11	Cutting, Hawley G.	1838	St. Lawrence	N. Y.	—	oil producer
12	DeGolier, Albert	1831	McKean	Penn.	—	oil producer
13	Dempsey, R. A.	1837	Venango	Penn.	—	oil operator
14	Dennis, William H.	1852	—	(England)	1877	carpenter
15	Durfey, Chas. A.	1838	—	Conn.	1877	real estate agt.
16	Emery, Jr., Lewis	1839	Chautauqua	N. Y.	1875	oil producer
17	Francis, Nelson M.	1836	Chautauqua	N. Y.	1877	oil producer
18	Griffith, Theodore M.	1841	Monroe	N. Y.	—	oil well contractor
19	Hamsher, Louis E.	1843	Livingston	N. Y.	1876	oil producer
20	Haskell, Judson E.	1844	Wyoming	N. Y.	1876	oil producer
21	Heffner, Samuel D.	1843	Huntingdon	Penn.	1879	oil producer
22	Jackson, Isaac G.	1844	—	Wis.	1876	oil producer
23	Johnson, F. S.	1840	Madison	N. Y.	1875	oil buyer-boarder
24	Johnston, Frank M. ⁴⁾	1850	(Westfield)	N. Y.	1881	—
25	Jones, Joseph T.	1842	(Philadelphia)	Penn.	1877	oil producer
26	Kirk, David ⁴⁾	1831	—	(Scotland)	—	oil operator
27	Laney, W. K. ⁵⁾	1844	—	(Germany)	—	contractor
28	Lockard, Lorenzo B. ⁶⁾	1838	Columbiana	Ohio	1879	oil operator
29	McCray, J. W. ⁷⁾	1840	Crawford	Penn.	1880	oil producer
30	McMullen, H. L.	1846	—	(Ireland)	1878	oil producer
31	Madison, L. O.	1848	Chautauqua	N. Y.	—	drills oil wells
32	Mallory, Lewis E. ⁸⁾	1849	Erie	N. Y.	1876	oil producer
33	Marck, Louis	1849	—	(France)	1878	hotelkeeper
34	Mulqueen, Patrick ⁹⁾	1848	—	(Ireland)	1877	—
35	Powers, Thomas J.	1835	Erie	N. Y.	1876	bookkeeper
36	Rolfe, E. W.	1849	(Concord)	N. H.	1883	lumberman
37	Saalfeld, Henry	1854	(Oldenburg)	(Germany)	—	oil producer
38	Southard, H. S. ⁹⁾	1841	(St. Louis)	Mo.	—	contractor
39	Straight, R. J.	1845	Crawford	Penn.	1876	oil producer-boarder
40	Tucker, Charles E.	1848	(Bath)	Me.	1881	clergyman
41	Walker, A. B.	1847	Butler	Penn.	1875	oil producer
42	Watson, Alex	1842	—	(Scotland)	1879	carpenter
43	Weaver, W. R.	1840	Hillsdale	Mich.	1876	oil producer
44	Wheeler, Samuel A. ¹⁰⁾	1837	—	Ohio	—	banker
45	Whitney, Charles S. ¹¹⁾	1824	—	Ohio	—	oil speculator
46	Wilbur, C. A.	1850	Chautauqua	N. Y.	1876	grocer
47	Wilbur, Frank S.	1862	Chautauqua	N. Y.	1878	grocer
48	Wilcox, A. I.	1819	Herkimer	N. Y.	—	oil producer
49	Williamson, E. S.	1847	(Buffalo)	N. Y.	1877	oil producer
50	Zane, John P. ¹⁾	1826	(Bridgeport)	N. J.	1877	—

(出典) *History of the Counties of McKean, Elk, Cameron and Potter*, pp. 327-413; U. S. Census (MSS), Population, Bradford

(備考) 1880年時点でブラッドフォード以外に居住していた人々には注番号を付した。彼らの居住地は以下の通り。1)

4) ニューヨーク州シトークア郡ジェイムズタウン (Jamestown), 5) マッキーン郡デュークセンター, 6) ヴル (Bordell), 10) ニューヨーク州イリー郡バッファロー, 11) ニューヨーク州アレガーニー郡ベルモントの居住地はブラッドフォードであるのに、ブラッドフォード来訪年が80年以降の者が若干認められる。伝記の誤

過去の原油掘鑿経験等のなかにはパイプライン関連も含めた。「パイプラインの従業員は原油生産者と日常的
信二『アメリカ・ビッグビジネス成立史：産業的フロンティアの消滅と寡占体制』東洋経済新報社、1986年、

オードのオイルマン

職 業	南方油田における掘鑿経験等	退役 軍人
1890年郷土史		
supt. Bradford Oil Co.	1865～72年：石油事業。	○
oil producer, flour and feed dealer, landowner	—	—
American Oil Co.	—	○
ass. Postmaster at Bradford	1866～70年：石油事業。(ヴェナング)	—
oil producer	1864年～：石油目的に農場リース。(ヴェナング)	—
oil producer and dealer in torpedoes	—	—
oil producer	1868年～：南方油田で働く。	—
proprietor of hotel	—	—
oil producer	—	○
oil producer	1865年～：ヴェナング郡に6年間滞在した後、石油事業。	—
oil producer and farmer, fine stock raiser	1862年～：油井の雇い人。	—
oil producer	—	—
ex-mayor of Bradford and capitalist	1860年代後半～：原油生産、71年～：精油所を経営。	○
oil producer, carpenter	—	—
oil producer, State oil inspector, dealer in real estate	1865～77年：Prescott & Seymour oil Co. の現場監督。(ヴェナング)	○
oil producer	1865年：ビットホール油田で活動開始。70年には、著名な生産者となるも破産。	—
oil producer	1873～77年：原油生産に従事。(ヴェナング)	○
dealer in hardware	1870年～：雇われの掘鑿人。(ヴェナング)	—
oil producer	1870～76年：2年間の油井での労働の後、クラリオン郡で独立して掘鑿。	○
oil producer	1865年～：Vandergrift & Foreman (パイプライン) に雇われる。	—
coroner of McKean County	1869～79年：石油事業。(79年ヴェナングからクラリオンへ)	○
oil producer	—	—
oil producer, oil dealer	1860年～：石油のディーラー、1873～75年：油田での雇い人。(ウォレン)	—
oil producer	1878～81年：南方油田で坑井掘鑿。	—
oil producer	1865～77年：当初の掘鑿は失敗に終わったが、やがて成功。(ヴェナング)	○
president of McCalmont Oil Co.	1860～62年：原油生産、62～70年：精油所経営、70年～：精油所の破綻後、油田開発。	—
oil producer & contractor	1860年代：油田で働く。	○
oil producer	1875～81年：南方油田で石油事業。	○
oil producer, firm of McCray Bros.	1865～80年：石油事業。(ヴェナング)	—
oil producer (Whitney & McMullen)	1878年まで原油生産者であった父親の手伝い。(ヴェナング)	—
Madison & Blossom, grocers	少年時代～1885年：油田で雇われた後、掘鑿請負。	—
oil producer	1864年～：掘鑿人、1869年～：オイルシティで独立。後にタイタスヴィルへ。	—
oil producer, proprietor of hotel	—	—
oil producer & proprietor of hotel	—	—
treasurer of the Bradford Oil Co.	—	—
oil producer	1860年代に坑井掘鑿。(クラリオン)	—
proprietor of hotel	—	—
oil business, lumbering	1860年代より坑井掘鑿。ニューヨークでは石油の投機家。	—
oil producer	1861～76年：油井で雇われながら自分の坑井を掘る。(ヴェナング、ウォレン)	—
oil producer	—	—
oil producer	1867～75年：油田で雇われながら自分の坑井を掘る。(バトラー)	—
oil producer	1865～79年：当初は油井槽の大工。やがて原油生産に成功か。(ヴェナング)	—
oil producer & hardware merchant	—	—
oil producer, banker	—	—
oil producer, banker	1860年代から油田で活動。	—
oil producer, merchant of oil well supplies	—	—
oil producer, merchant of oil well supplies	—	—
vice president of the Bradford, Bordell & Kinzua Railroad	—	—
proprietor of Williamson's restaurant	1864年から油田で働き始める。	—
oil producer	1863～70年：債務返済のためヴェナング郡で石油事業。破産。	—

Township, McKean County, Penn., 1880 などに基づいて作成。

ヴェナング郡タイタスヴィル、2) ヴェナング郡プレザントヴィル (Pleasantville)、3) マッキーン郡デュークセンター、エナング郡フランクリン、7) クラリオン郡ビーバー (Beaver)、8) マッキーン郡エルドレド、9) マッキーン郡ボーデ (Belmont)。a)、b) は1900年に、c) は1870年に人口センサス調査票で確認される者である。また、1880年センサス上記かもしれないが、理由はよく判らない。

に接触しており、原油生産についての経験の蓄積がなされていた」からである。塩見治人、溝田誠吾、谷口明丈、宮崎179頁。

1860年、70年センサス調査票にまで遡って彼等を追跡すればよいのであるが、それは他日の課題とし、本稿ではひとまず郷土史に依拠して情報を得ている。

それでは明らかになった点を踏まえて、ブラッドフォードのオイルマンの足取りを整理しておこう。彼等の多くは、全くの素人として単純に一攫千金を志して各地からブラッドフォードに流れ込んできたのではなかった。ヴェナング郡を中心とするオイルリージョンズ、つまり南方油田から1878年頃にやってきたのである。掘鑿人としての経験を積み資金を貯めつつ、新油田発見の報に接するや急いで駆け付け独立して坑井を掘り、最後には自前の油井をいくつか保有するようになる、これが当時の新米オイルマンの思い描いていた夢ではなかっただろうか。この点については本稿の冒頭に示した、オイルマンの社会的上昇についてのベッカムの言が想起される。また彼が、「流れ者の連中 (floating population)」と呼んだのは、旧油田から新油田へ何度となく渡り歩くこれらの人々に他ならなかった。ただし、こうした流れ者の存在にもかかわらず、個々の油井は圧倒的に小規模・零細経営であって、常に外部の者の労働を必要としていたわけではない。特に、油田一帯が採油段階に入ってしまうと、自営にせよ雇われにせよ掘鑿人の仕事はなくなるのである。1870年代末、南方油田の開発が頭打ちとなるなか、突如としてブームとなったブラッドフォード油田は、彼等が原油生産者へと上昇する機会を与える場、上昇できずとも差し当たりは仕事にありつける場、として立ち現れたと考えられる。かくして、Iでみたように、南方油田からマッキーン郡へ向かうオイルマンのラッシュや大移動 (exodus) といった内容が、地方紙で繰り返し報じられるようになるのである。1870年代にヴェナング郡が人口を減らした背景には、マッキーン郡に向かった流れ者としてのオイルマンの影響があったと考えられる。ニューヨークタイムズ紙はいう。「[マッキーン郡へのラッシュが始まって以来、]他の全ての油田は寂れてしまった。一方、ブラッドフォード油田は原油生産の世界的中心となった。」⁴⁹⁾ この過程で表の50人は新天地・ブラッドフォードで見事成功を収めるのであるが、忘れてはならないのはかつての彼等、つまり郷土史に登場しないその他のオイルマンである。就中、ブラッドフォードでは多数の掘鑿人の存在を考慮せねばならない。彼等こそが原油生産者予備軍を形成し、また次なるオイルラッシュのエンジンとなるべき人々だったのである。

最後に、やや細かい点となるが、表の50人のなかに11人の退役軍人が含まれていることについて捕足しておく。彼等は、いずれも南北戦争で戦った人々である。ちなみに、あのゴールドラッシュの担い手として、メキシコ戦争終結後の「落ち着き先が決まらぬ兵士が大勢いた」⁵⁰⁾、という事実はよく知られている。ブラッドフォードのオイルラッシュの場合、南北戦争終結から15年経過していることもあり、それと同列には扱えない。しかしながら、終戦を迎えた1865年は、ちょうど石油ブームがピットホールなどのヴェナング郡油田地帯を席卷していた時期に該当する。ギデンズによれば、この時には大量の落ち着き先

49) *The New York Times*, August 29, 1881, May 31, 1883.

50) 岡田泰男編『アメリカ地域発展史——諸地域の個性と魅力をさぐる——』有斐閣、1988年、219頁。

のない退役軍人がオイルリージョンズに入り込んできたという⁵¹⁾。表をもう一度確認してみると、確かに11人のうち9人が南方油田からブラッドフォードに流れてきている。また、除隊直後に油田にやってきた者も何人か存在する。このように、油田地帯に退役軍人が一定数存在した事実は、彼等が元々ラッシュ時の南方油田に多数入り込んできたこと、その後流れ者的なオイルマンとして油田地帯を渡り歩いたこと、これらに起因しているように思われる。

お わ り に

以上、ブラッドフォード油田のオイルラッシュを担った人々の具体像に迫る目的で議論を展開してきた。ここで明らかになった諸点を整理しておきたい。

第一に、ブラッドフォード油田の開発過程についてである。ブラッドフォード油田の開発は1870年代後半に集中して進められ、1880年には全国原油生産量の8割以上を生産するまでになった。短期間のうちに一挙に油田開発が進展しており、典型的なオイルラッシュが発生したとみてよい。その背景としては、極めて低い空井戸率と多数の自噴井の成功を実現した油層の性状が指摘できよう。油層性状の希少性ゆえに原油採掘の競争的性格は一段と強化されることとなったのである。一方で、原油生産会社は1860年代と同様、リースならびにサブリースを通じて自らの土地に多くのオイルマンを呼び込み、ロイヤルティを得つつ油田開発を進展させた。土地所有の経済的利害はブラッドフォード油田でも作用したと考えられる。

第二に、オイルラッシュでやってきた人々の人口動静についてである。1870年代の10年間にマッキーン郡の人口は3万4,000人近く増加し、約5倍に膨張した。また、増加した人口は多くが開発拠点としてのブラッドフォードシティ周辺に集中した。さらに、この人口集中は1870年代後半に顕著であったと考えられ、油田開発との密接な関連が観察される。1870年以前は概して経済的・人口的に停滞していたといえるマッキーン郡は、瞬く間に石油ブームの中心地となったのである。それでは、膨張した人口のなかにいたオイルマンの具体像はどのようなものであったか。オイルラッシュに沸くマッキーン郡のオイルマンとは、全体として、他の油田地帯のオイルマンとは大きく性格を異にする人々であった。すなわち、職業構成の側面で多数の原油生産者と掘鑿人から構成されていた。また彼等、特に掘鑿人のなかには多くの下宿住まいの単身者が存在した。概して掘鑿人は原油生産者よりも若く、粗末な下宿住まいをしながら油田で様々な経験を積み機会を窺う、いわば原油生産者予備軍的な層を成していた。また、彼等の7割以上が近隣諸州出身者で占められ、ヨーロッパからの移民は少数であった。

第三に、マッキーン郡の原油生産者として立ち現れた人々の過去の足取りについてである。彼等の多くは、かつて南方油田で原油採掘関連の事業に係わった経験を持つ人々であった。さらにいえば、南方油田の油井で雇われて掘鑿に従事した者、採掘事業を行ってい

51) Giddens, *op. cit.*, pp. 129-130.

たが破産した者，南北戦争終結直後に落ち着き先を求めてやってきた退役軍人，等々であった。つまり，かつての彼等はマッキーン郡で多数認められる掘鑿人と同様の立場にあったことが窺える。多数の掘鑿人は油田から油田へと移動しつつ上昇を目指す「流れ者の連中」であり，彼等こそがオイルラッシュのエンジンを構成した階層であったと考えられるのである。